

令和7年度 第3回アカデミー講座

移動が変える、奥入瀬が変わる ～野外博物館構想でつなぐ、人と自然とモビリティ～

1. 主催者挨拶

宮下 宗一郎 青森県知事／奥入瀬十和田利活用協議会 会長
【代読】鈴木 政孝 青森県県土整備部道路課 課長代理



2. 基調講演

講師：谷口 綾子(たにぐち あやこ) 氏
筑波大学 システム情報系社会工学域 公共心理研究室 教授
奥入瀬渓流利活用検討委員会 委員



3. 公共心理研究室 学生研究発表

- I. 8月のリサーチマッピング結果報告／筑波大学大学院 真谷 健悟 氏
- II. 2024年10月奥入瀬渓流における自動運転バス実験のラッピング経緯と
観光客の反応評価／筑波大学大学院 星野 明日美 氏

本講座では、谷口教授が奥入瀬渓流の観光と交通の課題を示し、自家用車・大型バス依存が自然体験を損なう「社会的ジレンマ」を生むと指摘しました。解決策として利用者の行動変容を促すモビリティ・マネジメント(MM)の有効性を紹介。学生研究発表では、地域への関心を高めるリサーチマッピングの成果や、自動運転バスの受容性調査を通じた歩行者空間の課題が報告されました。持続可能な観光には、インフラ整備だけでなく地域との対話や賢い交通行動の促進が重要であることが強調されました。

『移動が変える、奥入瀬が変わる ～野外博物館構想でつなぐ、人と自然とモビリティ』 講師：谷口 綾子 氏

1. 奥入瀬渓流の現状と課題

- ・東京・自由が丘の実験では、車が走行すると歩きにくさや雰囲気の悪化が生じ、街歩きの楽しさが損なわれることが確認された。
- ・奥入瀬でも同様の状況が見られ、マイカーや大型バスは本来の自然体験を妨げている。
- ・より豊かな楽しみ方を提供するため、自家用車以外の移動手段の価値を伝える必要がある。
→ そのために、モビリティ・マネジメント(MM)の導入が重要。



OIRASE ACADEMY

2. モビリティ・マネジメント(MM)の提唱

- ・MMは、移動行動を社会・個人に望ましい方向に自発的に変化させるコミュニケーション中心の政策。
- ・目的は「かしこいクルマの使い方」への行動変容を促すこと。

3. 行動変容を促す3つの戦略

- ①金(マネー):税制や道路課金、公共交通の低廉化
- ②力(フォース):車両規制など法的な措置
- ③言葉(メッセージ):説得・教育・キャンペーンによる理解促進
→特に③は長期的な定着に不可欠で、①②導入の土台となる。

4. モビリティ・マネジメント(MM)の具体的なステップ

- ・動機付け:なぜクルマを控えた方がよいかをターゲット層に合わせ情報提供
- ・代替手段の情報提供:バス路線図、時刻表や利用方法などを案内
- ・行動プラン策定:バス利用等をシミュレーションすることで心理的ハードルを低減
- ・イメージ戦略:公共交通の魅力を伝え、奥入瀬に馴染むモビリティを検討
- ・物語(ナラティブ)による地域愛着醸成:16名の語りをまとめた物語を構築、行政の広報誌や研修などで共有し「自分ごと化」を促すことを検討中

I. 8月のリサーチマッピング結果報告 / 筑波大学大学院 真谷 健悟 氏

- ・リサーチマッピングは、決められた範囲で自然を観察し、メモやスケッチでオリジナルマップを作成する双方向型プログラム。
- ・参加者が能動的に探索し、専門家の解説で理解を深める点が特徴。
- ・目的は「自然を観る力」養成、感動の向上、奥入瀬への愛着醸成。
- ・8名の学生が参加し、「自然を楽しめる自分に気づいた」「奥入瀬への愛着が増した」などポジティブな成果。
- ・発表時、ガイドからのコメントや補足説明で理解が深まった。
- ・他者の自然観や表現に触れられることがメリット。
- ・作品を他の方々と共有しコメントできる仕組みづくりを提案。

II. 2024年10月奥入瀬渓流における自動運転バス実験のラッピング経緯と観光客の反応評価 / 筑波大学大学院 星野 明日美 氏

- ・自動運転バスの外観デザインが社会的受容(配慮行動)を高めるかを検証。奥入瀬渓流でアンケートとドライブレコーダー映像を分析。
- ・自動運転バスMiCaにトチノキやカツラの葉、キノコ、シダ、渓流などをモチーフにしたラッピングを施し、マイカー規制期間に走行。
- ・アンケート結果:実際に見た・乗った人ほどラッピング評価や「見守ろうと思う」意識が高い。
- ・映像分析:歩行者が撮影、手を振るなどポジティブな行動を多数確認。
- ・課題:対向車や歩行者を障害物と認識し急停止・減速するケースが多い。
- ・奥入瀬は歩行者優先空間。今後は「優しく走る自動運転バス」が空間と調和し、共存する仕組みが重要。

